

# テオ・アシュフォード 29歳

## あなたの物語

雑巾ってのは放っとけば放っとくほど臭くなる。わかってんだけど、俺は今日も、その雑巾を使ってる。いつ洗ったか分からないソレをそのままモップの先に巻き付けて、モーテル"REMEMBER"の廊下をだらだら擦ってた。これが俺の仕事。掃除、ゴミ捨て、電球替え、客の忘れ物の処理……まあ、要するに「雑用」だ。

俺はテオ・アシュフォード、29歳。孤児院で育って、気付いたらこのモーテル「REMEMBER」に転がり込んでいた。ミズーリ州の外れにあるこの寂れた場所は、近くに空港があり便利であることを除けば特に変哲のないモーテルだ。

マーサ(このモーテルの女主人で、もう60歳になるであろうババアだ)が拾ってくれたから、こうして安月給だが食わせてもらってる。この怠惰な人生に目標なんて無い。明日のメシに困らなければ十分。チップは煙草とギャンブルに消える毎日だ。

首から下げたペンダントを開く。クソみてえな人生の中で一つだけ、大事にしている物だ。そこには写真が入っている。パーマがかかった茶髪で、にっこりと優しく微笑んでいる女性の写真だ。「エレナ」という。俺の母親らしい。——“らしい”ってのは、残ってるのがこの写真と、うっすらとした母親の匂いの記憶だけだからだ。父親は俺が産まれるより前に死んで、母親は、俺を産んだ1週間後に失踪したって話だ。

ペンダントの蓋の裏には、小さく折りたたまれた紙が挟まっている。何度も開け閉めするうちに端が擦り切れ、文字がかすれてしまった、古い手紙だ。俺が産まれた日に母親が残してくれた唯一の手紙。もう手紙の内容は覚えてしまった。

“テオへ。いつかあなたがこの世界で、心から信じられる誰かと出会えますように。February 5, 1960”

(※アメリカ式の記載で1960年2月5日)

今日は10月12日。日は変わってしまったが、雑用が終われば、深夜の街に繰り出してバーでポーカーだ。そんなことに思いをはせながら、ポケットに入れた小さなボトルのウイスキーを飲み干す。そんな風にサボりながら歩いていると、廊下の蛍光灯がチカチカしている事に気付いた。……まあいっか、明日で。

「テオ、洗濯機止まってるよ」

背後からダミ声がする。振り返るとマーサが仁王立ちしていた。

「アイノウ。今、テレキネシス・モードで干そうとしてるとこだ！ ハッ！」

俺の謎の動きを見てマーサは鼻で笑った。レジの引き出しからクォーター(25セント)を一枚、俺の手に押しつける。

「その“テレキネシス”ってのは小銭で動くらしいね。ついでに裏口のゴミも頼むよ」

「イエス、マダム」

俺が恭しくお辞儀をすると、マーサはフンツと鼻を鳴らして奥に引っ込んでいった。

「ありがたく頂戴するぜ。今日こそロイヤルストレートフラッシュだ」

親指でピンツとはじいたクォーターを、空中でつかんでポケットに突っ込む。マーサの機嫌が良いのは良い兆候だ。今日はポーカーに勝てる気がする。

そういえば……。ポケットに突っ込んだ手で、別のものをつまんで取り出す。それは、いつも持ち歩いている金色の目のダイスだ。

「今日も頼んだぜ、相棒」

俺は誰に聞かせるでもなくつぶやいて、ダイスを指で転がす。このダイスに特別な思い出が入っているのは、数年前。深夜のバーのポーカーで、どうしても負け続けていた時だ。

最終勝負。相手は強面の男で、テーブルの上には、俺のほぼ全財産のチップが積まれていた。クソッ、このままじゃスッカラカンだ……。その時、俺が手持ち無沙汰に手遊びしていたダイスが転げ落ちた。客の忘れ物を拝借したやつだ。コロコロと揺れて止まった面——金色の「6」。

その瞬間、俺は「イケる」と思った。実際、俺はそこから逆転して大勝ちした。それ以来、このダイスは『ラッキーアイテム』として持ち歩いている。

——そんなことを考えながら洗濯室に行き、洗濯物を干して裏口へと回る。錆びついたドアを開けると、キツイ生ゴミの臭いが鼻を刺す。ゴミ袋は何かにつかかかれて破けている。猫かアライグマか、どちらかが仕事を手伝ってくれたらしい。

「オー・マイ・ガー。パーティー会場はここじゃねえぞ」

ゴミを片付けると、裏口に來たついでに煙草を一本取り出す。ふうと煙を吐いてペンダントを取り出し、母エレナの写真を見る。失踪、という事はいつかどこかで見つかる。——と淡い期待を抱く事もある。見上げた月は丸い。世界のどこかで母は、同じ月を見ているのだろうか。……。モーター入口に掲げられたネオンサインの音がジジッと鳴る。「REMEMBER」の“REM”が消えている。

「残り火(EMBER)……」

煙草の火を見ながらつぶやく。ネオンは、今度直さなきゃな。

ブロロ……と近付いてきた車のエンジン音がモーターの駐車場で止まった。ドアが開いて、ベルが鳴ったのがわかる。客が入ってきたのだ。俺は煙草を灰皿に押し付け、仕事に戻る事にした。

雑用はまだ残ってる。208号室のドアノブの調子が悪いんだ。工具箱を担いで、階段を上がる。プレートの数字を端から見やる。204、205、206、……。俺は208号室を目指した。

———  
STOP！指示があるまで次のページを開かないでください  
———

## 目的

- 目の前に居る男の正体を探る。
  - 自分の正体を探られすぎないようにする。
- ※男の事を信用しきることは出来ない。注意しよう。

-----  
**STOP ! 指示があるまで次のページを開かないでください**  
-----

## 目的(追加)

先ほどの目的に加えて、新しい目的が追加された

- 投票フェイズで、白骨化した人物を殺した犯人に投票する  
※真相を探るためには、状況に応じて、自分の正体や気づいた事について共有する必要があるだろう。